

## テムズ川

Thames River

イギリス



イギリス南部を流れるテムズ川(流域面積13,600km<sup>2</sup>)は、河口から約60km上流に首都ロンドンを抱えるイギリスを代表する河川で、18世紀の産業革命以降、国際的な政治、経済、文化の中心地として繁栄しました。河口から約150kmまでが感潮区間と勾配が緩いこともあり、船を利用した物流が発達し、テムズ川両岸には多くの工場や港湾施設が建設されました。



水質汚濁が激しい頃のテムズ川の様子



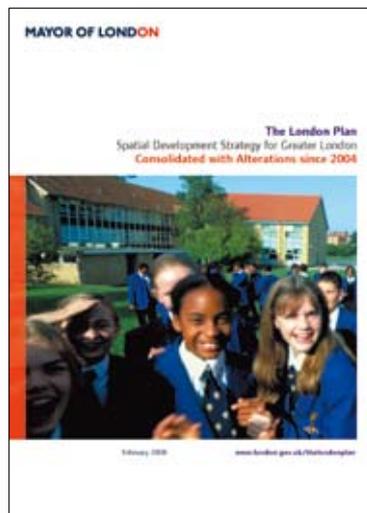
しかし、この川に沿った工業地帯により、水辺空間と都市空間が分断されるとともに、イギリス国内

の多くの河川と同様に、沿川からの工場廃水や人口増加に伴う生活排水の流入により激しく汚染され、1950年頃にはロンドン中心部(Kew)から河口付近(Gravesend)までの魚が絶滅するなど生態的に死の川へと変貌しました。

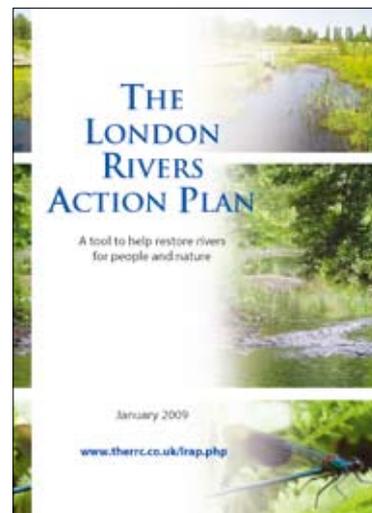
テムズ川の悪臭が都市活動に支障をきたすほどに荒廃した20世紀半ば頃から、沿川及び流域全体での河川再生に向けた取り組みが進められています。水辺の親水性向上を図るため、1930年代から水辺空間へのアクセス性を高めるための取り組みが始まり、その後第二次世界大戦後の復興計画を経て現在に至るまで、街と一体となった水辺整備

が進められています。また水質汚濁に対しては、1960年代から産業廃水や農地からの排水に対して厳しい法規制を課すことで、水環境の大幅な改善が図られつつあります。

現在は、2004年に策定された「ロンドンプラン(The London Plan - spatial development Strategy for Greater London)」に基づき、持続可能な都市の発展に向け水問題をロンドンの街づくりにおける意思決定の出発点と位置付け、テムズ川本川と支流、さらにそこに繋がる



ロンドンプラン (2004)



河川アクションプラン (2009)

る運河や湖沼を「ブルーリボンネットワーク」として結びつけることで、テムズ川を軸とした流域全体の自然と都市の再生が進められています。このブルーリボンネットワークでは、舟運による貨客輸送や観光の促進、川沿いの歴史的建造物に配慮した景観形成、水辺のオープン空間の確保、多様な生物の生息が可能となる水質の改善などが主な再生目標となっています。

**半**世紀以上に及ぶテムズ川再生に向けた取組みにより、水質判定基準で「良好」を示す地点数が1990年の53%から2008年には80%に改善され、また現在では125種の魚類が生息し、さらに動植物の生息・生息環境を約400箇所整備するなどの成果が表れています。また、2009年にはテムズ川流域全体を対象とした「ロンドン河川アクションプラン(The London Rivers Action Plan)」が策定され、先のロンドンプランと整合を図りながら、テムズ川支流の中小河川の環境再生に向けた58事業が計画され、既に9事業が着手されています。

テムズ川流域が今後直面する気候変動、人口増加、河川に関わる構造物の老朽化などへの対応も含め、持続可能な都市生活と生物の生息・生育環境の保全の両立を目指した、行政関係者、NGO、市民団体等の連携による河川再生が今後も続けられていきます。

なお、テムズ川は、世界的に優れた河川再生事例として、オーストラリアに本拠地を置く国際河川財団が1999年より主催する「国際河川賞(International Riverprize)」を2010年に受賞しました。



遡上してきたサーモン



テムズ川での観光舟運